

虞美人草

夏目漱石

新潮文庫

新潮文庫

虞美人草

夏目漱石著

新潮社版

虞美人草

「随分遠いね。元来何所から登るのだ」

と一人が手巾で額を拭きながら立ち留った。

「何所か己にも判然せんがね。何所から登ったって、同じ事だ。山はあすこに見えているんだから」と顔も体軀も四角に出来上った男が無雑作に答えた。

反を打った中折れの茶の廂の下から、深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、底までも藍を漂わして、吹けば揺くかと怪しまるる程柔らかき中に屹然として、どうする気かと云わぬばかりに叡山が聳えている。

「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出して、一寸桜の杖に身を倚たせていたが、

「あんなに見えるんだから、訳はない」と今度は叡山を軽蔑した様な事を云う。

「あんなに見えるって、見えるのは今朝宿を立つ時から見えている。京都へ来て叡山が見えなくなっちゃ大変だ」

「だから見えてるから、好いじゃないか。余計な事を云わずに歩行していれば自然と山の上へ出るさ」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いでいる。日頃からなる廂に遮ぎられて、菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ広き額だけは目立って蒼白い。

「おい、今から休息しちゃ大変だ、さあ早く行こう」

相手は汗ばんだ額を、思うまま春風はるかぜに曝さらして、粘り着いた黒髪の、逆に飛ばぬを恨む如くに、手巾ハンカチを片手に握って、額とも云わず、顔とも云わず、頸窩ぼんのくぼの尽くるあたりまで、苦茶々々に掻かき廻した。促がされた事には頓着とんじやくする気色けしきもなく、

「君はあの山を頑固だと云ったね」と聞く。

「うむ、動かばこそと云った様な按排あんばいじゃないか。こう云う風に」と四角な肩をいとど四角にして、空いた方の手に榮螺さざえの親類をつくりながら、聊いささか我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云うのは、動けるのに動かない時の事を云うのだろう」と細長い眼の角から斜めに相手を見下した。

「そうさ」

「あの山は動けるかい」

「アハハハ又始まった。君は余計な事を云いに生れて来た男だ。さあ行くぜ」と太い桜の洋杖ステッキを、ひゅうと鳴らさぬばかりに、肩の上まで上げるや否や、歩行あるき出した。瘠やせた男も手巾を袂たもとに収めて歩行あるき出す。

「今日は山端やまはなの平八茶屋へいはちで一日遊いちんちんだ方がよかった。今から登ったって中途半端になるばかりだ。元来頂上まで何里あるのかい」

「頂上まで一里半だ」

「どこから」

「どこからか分るものか、高たかの知れた京都の山だ」

瘠せた男は何にも云わずににやにやと笑った。四角な男は威勢よく喋舌り続ける。

「君の様に計画ばかりして一向実行しない男と旅行すると、どこもかしこも見損^{そこな}つてしまう。連^{つれ}こそいい迷惑だ」

「君の様に無茶に飛び出されても相手は迷惑だ。第一、人を連れ出して置きながら、何処から登って、何処を見て、何処へ下りるのか見当がつかんじゃないか」

「なんの、これしきの事に計画も何もいったものか、高があ^あの山じゃないか」

「あの山でもいいが、あの山は高さ何千尺だか知^しっているかい」

「知るものかね。そんな下らん事を。——君知^しってるのか」

「僕も知らんがね」

「それ見るがいい」

「何もそんなに威張^{おご}らなくてもいい。君だって知らんのだから。山の高さは御互に知らんとして、山の上で何を見物して何時間かかる位は多少確めて来なくっちゃ、予定通りに日程は進行するものじゃない」

「進行しなければ遣^やり直すだけだ。君の様に余計な事を考えてるうちには何遍でも遣^やり直しが出来るよ」と猶^{なほ}さっさと行く。瘠せた男は無言のままあとに後^{おく}れてしまう。

春はものの句になり易^{やす}き京の町^{まち}を、七条から一条まで横に貫ぬいて、烟^ける柳の間から、温^ぬき水打^{うち}つ白^{しろ}き布^ふを、高^{たか}野^の川^{がわ}の碛^{かき}に数え尽^はくして、長々と北にうねる路^{みち}を、大方は二里余りも来たら、山^{おの}は自^{みづか}ら左右に逼^{せま}つて、脚^{あし}下^{した}に奔^はる潺^{せん}湲^{かん}の響^{こも}も、折^をれる程に曲^まる程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更^ふけたるを、山を極^{きま}めたらば春はまだ残る雪に寒^{さむ}かろうと、

見上げる峯の裾を縫うて、暗き陰に走る一条の路に、爪上りなる向うから大原女が来る。牛が来る。京の春は牛の尿の尽きざる程に、長くかつ静かである。

「おい」と後れた男は立ち留りながら、先きなる友を呼んだ。おいと云う声が白く光る路を、春風に送られながら、のそり閑と行き尽して、萱ばかりなる突き当りの山に打突った時、一丁先きに動いていた四角な影はたと留った。瘠せた男は、長い手を肩より高く伸して、返れ返れと二度程揺って見せる。桜の杖が暖かき日を受けて、又ぴかりと肩の先に光ったと思う間もなく、彼は帰って来た。

「何だい」

「何だいじゃない。此所から登るんだ」

「こんな所から登るのか。少し妙だぜ。こんな丸木橋を渡るのは妙だぜ」

「君みた様に無暗に歩いていると若狭の国へ出てしまうよ」

「若狭へ出ても構わんが、一体君は地理を心得ているのか」

「今大原女に聴いて見た。この橋を渡って、あの細い道に向へ一里上がると出るそうだ」

「出るとは何処へ出るのだい」

「叡山の上へさ」

「叡山の上の何処へ出るだろう」

「そりゃ知らない。登って見なければ分らないさ」

「ハハハ君の様な計画好きでも其所までは聞かなかったと見えるね。千慮の一失か。それじゃ、仰せに従って渡るとするかな。君愈登りだぜ。どうだ、歩行けるか」

「歩行けないたって、仕方がない」

「成程哲学者だけあらあ。それで、もう少し判然すると一人前だがな」

「何でも好いから、先へ行くが好い」

「あとから尾いて来るかい」

「いいから行くが好い」

「尾いて来る気なら行くさ」

溪川に危うく渡せる一本橋を前後して横切った二人の影は、草山の草繁き中を、辛うじて一縷の細き力に頂きへ抜ける小径のなかに隠れた。草は固より去年の霜を持ち越したまま立枯の姿であるが、薄く溶けた雲を透して真上から射し込む日影に蒸し返されて、両頬のほてるばかりに暖かい。

「おい、君、甲野さん」と振り返る。甲野さんは細い山道に適當した細い体軀を真直に立てたまま、下を向いて

「うん」と答えた。

「そろそろ降参しかけたな。弱い男だ。あの下を見給え」と例の桜の杖を左から右へかけて一振りに振り廻す。

振り廻した杖の先の尽くる、遙か向うには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え崩るるまでに濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなさに描き出してある。

「なる程好い景色だ」と甲野さんは例の長身を振り向けて、際どく六十度の勾配に擦り落ちもせ

ず立ち留っている。

「いつの間に、こんなに高く登ったんだろう。早いものだな」と宗近君^{むねちか}が云う。宗近君は四角な男の名である。

「知らぬ間に墮落したり、知らぬ間に悟ったりするのと同じ様なものだろう」

「昼が夜になったり、春が夏になったり、若いものが年寄りになったり、するのと同じ事かな。それなら、おれも疾^とくに心得ている」

「ハハハそれで君は幾歳^{いくつ}だったかな」

「おれの幾歳より、君は幾歳だ」

「僕は分かつてるさ」

「僕だって分かつてるさ」

「ハハハやっぱり隠す了見だと見える」

「隠すものか、ちゃんと分かつてるよ」

「だから、幾歳なんだよ」

「君から先へ云え」と宗近君は中々動じない。

「僕は二十七さ」と甲野君は雑作もなく言^のって退ける。

「そうか、それじゃ、僕も二十八だ」

「大分^{だいぶ}年を取ったものだね」

「冗談を言うな。たった一つしか違わんじやないか」

「だから御互にさ。御互に年を取ったと云うんだ」

「うん御互にか、御互なら勘弁するが、おれだけじゃ……」

「聞き捨てにならんか。そう氣にするだけまだ若い所もある様だ」

「何だ坂の途中で人を馬鹿にするな」

「そら、坂の途中で邪魔になる。ちょっと退いて遣れ」

百折れ千折れ、五間とは直に続かぬ坂道を、呑気な顔の女が、御免やすと下りて来る。身の丈に余る粗朶の大束を、緑り洩る濃き髪の上に圧え付けて、手も懸けずに戴きながら、宗近君の横を擦り抜ける。生い茂る立ち枯れの萱をごそつかせた後ろ姿の眼につくは、目暗縞の黒きが中を斜に抜けた赤襷である。一里を隔てても、そこと指す指の先に、引っ着いて見える程の藁葺は、この女の家でもあろう。天武天皇の落ちたまえる昔のまに、棚引く霞は長しえに八瀬の山里を封じて長閑である。

「この辺の女はみんな奇麗だな。感心だ。何だか画の様だ」と宗近君が云う。

「あれが大原女なんだろう」

「なに八瀬女だ」

「八瀬女と云うのは聞いた事がないぜ」

「なくっても八瀬の女に違ない。嘘だと思ふなら今度逢ったら聞いて見よう」

「誰も嘘だと云やしない。然しあんな女を総称して大原女と云うんだろじゃないか」

「きつとそうか、受合うか」

「そうする方が詩的でいい。何となく雅でいい」

「じゃ当分雅号として用いてやるかな」

「雅号は好いよ。世の中には色々な雅号があるからな。立憲政体だの。万有神教だの、忠、信、孝、悌、だのって様々な奴があるから」

「なる程、蕎麦屋に藪が沢山出来て、牛肉屋がみんないろはになるのもその格だね」

「そうさ、御互に学士を名乗ってるのも同じ事だ」

「つまらない。そんな事に帰着するなら雅号は廃せよよかった」

「これから君は外交官の雅号を取るんだろう」

「ハハハハあの雅号は中々取れない。試験官に雅味のある奴が居ない所為だな」

「もう何遍落第したかね。三遍か」

「馬鹿を申せ」

「じゃ二遍か」

「なんだ、ちゃんと知ってる癖に。憚りながら落第はこれでたった一遍だ」

「一度受けて一遍なんだから、これからさき……」

「何遍やるか分らないとなると、おれも少々心細い。ハハハハ。時に僕の雅号はそれでいいが、君は全体何をするんだい」

「僕か。僕は叡山へ登るのさ。——おい君、そう後足で石を転がしてはいかん。後から尾いて行くものが剣呑だ。——ああ随分草臥た。僕はここで休むよ」と甲野さんは、がさりと音を立てて枯薄の中へ仰向けに倒れた。

「おやもう落第か。口でこそ色々な雅号を唱えるが、山登りはから駄目だね」と宗近君は例の桜の杖で、甲野さんの寐ている頭の先をこつこつ敲く。敲く度に杖の先が薄を薙ぎ倒してがさがさ

音を立てる。

「さあ起きた。もう少して頂上だ。どうせ休むなら及第してから、緩ゆるっくり休もう。さあ起きろ」

「うん」

「うんか、おやおや」

「反吐へどが出そうだ」

「反吐を吐いて落第するのか、おやおや。じゃ仕方がない。おれも一と休息やすみ仕つかまつろう」

甲野さんは黒い頭を、黄ばんだ草の間に押し込んで、帽子も傘も坂道に転がしたまま、仰向けに空を眺ながめている。蒼白く面高おもたかに削り成せる彼の顔と、無辺際に浮き出す薄き雲の儼然ゆうぜんと消えて入る大いなる天上界の間には、一塵の眼を遮しんぎるものもない。反吐は地面の上へ吐くものである。大空に向う彼の眼中には、地を離れ、俗を離れ、古今の世を離れて万里の天があるのみである。

宗近君は米沢よねざわ絢がすりの羽織を脱いで、袖そで畳たたみにして一寸肩の上へ乗せたが、又思い返して、今度は胸の中から両手をむずと出して、うんと云う間に諸肌もろはだを脱いだ。下から袖無ちゆんちゆんが露あらわれる。袖無の裏から、もじやもじやした狐きつねの皮が食はみ出している。これは支那しなへ行った友人の贈り物として君が大事の袖無である。千羊の皮は一狐の腋えきにしかずと云って、君はいつでもこの袖無を一着している。その癖裏に着けた狐の皮は斑まだらにほうけて、無暗むやみに脱落するところを以て見ると、何でも余程性の悪い野良狐に違ちがない。

「御山おやまへ御登りやすのどすか、案内しまほうか、ホホホ妙けつたいな所に寐とこていやはる」と又目暗めくらじま縞しまが下りて来る。

「おい、甲野さん。妙な所に寐ねていやはるとき。女にまで馬鹿にされるぜ。好い加減に起きてあるこうじゃないか」

「女は人を馬鹿にするもんだ」

と甲野さんは依然として天を眺めている。

「そう泰然と尻しりを据えちゃ困るな。まだ反吐を吐きそうかい」

「動けば吐く」

「厄介だなあ」

「凡ての反吐は動くから吐くのだよ。俗界万斛ばんこくの反吐皆動の一字より来る」

「何だ本当に吐く積りじゃないのか。つまらない。僕は又愈いよいよとなったら、君を担いで麓まで下りなけりゃならんかと思つて、内心少々辟易へきえきしていたんだ」

「余計な御世話だ。誰も頼みもしないのに」

「君は愛嬌あいぎょうのない男だね」

「君は愛嬌の定義を知つてゐるかい」

「何のかのと云つて、一分でも余計動かずにいようと云う算段だな。怪しからん男だ」

「愛嬌と云うのはね、——自分より強いものを斃たおす柔かい武器だよ」

「それじゃ無愛想は自分より弱いものを、扱こき使う鋭利なる武器だろう」

「そんな論理があるものか。動こうとすればこそ愛嬌も必要になる。動けば反吐を吐くと知った人間に愛嬌あいぎょうがいるものか」

「いやに詭弁ぎべんを弄ろうするね。そんなら僕は御先へ御免蒙こうむるぜ。いいか」

「勝手にするがいい」と甲野さんはやっぱり空を眺めている。

宗近君は脱いだ両袖をぐるぐると腰へ巻き付けると共に、毛脛に纏わる堅縞の裾をぐいと端折って、同じく白縮緬の周囲に畳み込む。最前袖畳にした羽織を桜の杖の先へ引き懸けるが早い。「一剣天下を行く」と遠慮のない声を出しながら、十歩に尽くる岨路を飄然として左へ折れたぎり見えなくなつた。

あとは静である。静かなる事定つて、静かなるうちに、わが一脉の命を托すると知った時、この大乾坤のいずくにか通う、わが血潮は、肅々と動くにも拘わらず、音なくして寂定裏に形骸を土木視して、しかも依稀たる活気を帯ぶ。生きてあらん程の自覺に、生きて受くべき有耶無耶の累を捨てたるは、雲の岫を出で、空の朝な夕なを変わると同じく、凡ての拘泥を超絶したる活気である。古今来を空しゅうして、東西位を尽くしたる世界の外なる世界に片足を踏み込んでこそ——それではなければ化石になりたい。赤も吸い、青も吸い、黄も紫も吸い尽くして、元の五彩に還す事を知らぬ真黒な化石になりたい。それでなければ死んで見たい。死は万事の終である。又万事の始めである。時を積んで日となすとも、日を積んで月となすとも、月を積んで年となすとも、詮ずるに凡てを積んで墓となすに過ぎぬ。墓の此方側なる凡てのいさくさは、肉一重の垣に隔てられた因果に、枯れ果てたる骸骨にいらぬ情けの油を注して、要なき屍に長夜の蹊をおどらしむる滑稽である。遯なる心を持てるものは、遯なる国をこそ慕え。

考へるともなく考へた甲野君は漸くに身を起した。又歩行かねばならぬ。見たくもない叡山を見て、いらざる豆の数々に、役にも立たぬ登山の痕迹を、二三日が程は、苦しき記念と残さねばならぬ。苦しき記念が必要なれば数えて白頭に至って尽きぬ程ある。裂いて髓に入つて消えぬ程

ある。いたずらに足の底に膨れ上る豆の十や二十——と切り石の鋭どき上に半ば掛けたる編み上げの踵を見下ろす途端、石はきりりと面を更えて、乗せかけた足をすわと云う間に二尺程滑べらした。甲野さんは

「万里の道を見ず」

と小声に吟じながら、傘を力に、艮路を登り詰めると、急に折れた胸突坂が、下から来る人を天に誘う風情で帽に逼って立っている。甲野さんは真廂を煽って坂の下から真一文字に坂の尽きる頂きを見上げた。坂の尽きた頂きから、淡きうちに限りなき春の色を漲ぎらしたる果もなき空を見上げた。甲野さんはこの時

「只万里の天を見る」

と第二の句を、同じく小声に歌った。

草山を登り詰めて、雑木の間を四五段上ると、急に肩から暗くなって、踏む靴の底が、湿っぽく思われる。路は山の脊を、西から東へ渡して、忽ちのうちに草を失するとすぐ森に移ったのである。近江の空を深く色どるこの森の、動かねば、その上の幹と、その上の枝が、幾重幾里に連なりて、昔しながらの翠りを年毎に黒く畳むと見える。二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋めて、猶余りある葉裏に、三藐三菩提の仏達を埋め尽くして、森々と半空に聳ゆるは、伝教大師以来の杉である。甲野さんは只一人この杉の下を通る。

右よりし左よりして、行く人を両手に遮ぎる杉の根は、土を穿ち石を裂いて深く地盤に食い入るのみか、余る力に、跳ね返して暗き道を、二寸の高さに段々と横切っている。登らんとする岩の梯子に、自然の枕木を敷いて、踏み心地よき幾級の階を、山霊の賜と甲野さんは息を切らして